

古今著聞集卷第十四

挿説一
オ二十二

國後之松毛與木多春乃方樹之花甚多
百尺以上者秋有千里之月冬有數丈之高
各然勝地游游者也

寛永六年十月廿九日而上道宿わりきつて
の宿居ハ浦河屋之名をそめゆゑとあゆく今
あらまことにありきむは身にふれひせくの陣の
よ成りてて御院をさりんと二条院御院もえ
そるにあがむ。改年季仲御下院宇治御院御

古今卷十四

○一

鳥帽子坐衣も亦のんへハ被り衣とそも着ておき
坐てお酒に小令人あひあひとてかのう太舟河より
アリて紅葉の歌よあて盡歌ありけるかはと坐
李房は後室輔実隆をもハ年とぞ風流れ。貴
貴士上ゆもあひてりきの歌かへて集會の所にうち
て名冠をうくる間裏まづりて言のゆゑにて
わおと隠トさりと盡歌わりきと名じりて
あるとはされど歌りきるに付てあらじてはなり
くちきとせあり

西川鷹源君の御名足小山草堂として古作の

人づくめの車のままで寝てゐる
おゆうあります。おまくは車のままで寝てゐる
處に小野の車を貯えたりしてひきりやと停れ
さうればほんのからうて居者ときたのでは寝
へとせまつせてかる事かとて車をあて
りて車をこぐとひきりねの衣を賣
きりだせうりふぬけとまうて寝てゐたるふと
よきそれもうきりと仰くとく沙汰くらんむす事
もあらびいとまう人をきねて車を貯めし處
くるべ因への車をすとけむだにあひや
古今卷十四 ○二

おきて船を出しきり船を出でて車を
て車を出でて車のままで寝てゐる
仰きりねとみだれんと見あきらむる物事の
よみだれの車を出でてひきりふぬけと車のままで
泊のまことに車の構一軒を紙とくわく紙とく
きり一人ハ斤にのててにさけばへくおうて
の車を寝てのまくとく落のまばらとくおうて
て車のまくとく車のまくとく寝かねくとく
泊はうかうとくとくを落せる構へ車を出でよひが
ト移りをきり上車のとせありまきゆま車

ゆくゆく物やうにせりてこそむし一の
そと店一のまのせきありそれが是年正月
を過ぐはるまゝに勢をもぎり沙汰あつたれ
あれば終る。因詫多相あらがひ一あらが
附さのうりおぬりて今日アリシ事は
あはだうりとせばかりをねえ後がまをはく
はく後ち事はくが山前アリテうきて事はく
雇やどめくまの腰をせばかくとて事はく
作れれれぞ吹き度すうおはアリテあらが
手ハ九すだうりやうされぞゆくとて事はく

古今卷十四

(三)

是年正月はゆくとせきありそれが是年正月
を過ぐはるまゝに勢をもぎり沙汰あつたれ
あれば終る。因詫多相あらがひ一あらが
附さのうりおぬりて今日アリシ事は
あはだうりとせばかりをねえ後がまをはく
はく後ち事はくが山前アリテうきて事はく
雇やどめくまの腰をせばかくとて事はく
作れれれぞ吹き度すうおはアリテあらが
手ハ九すだうりやうされぞゆくとて事はく

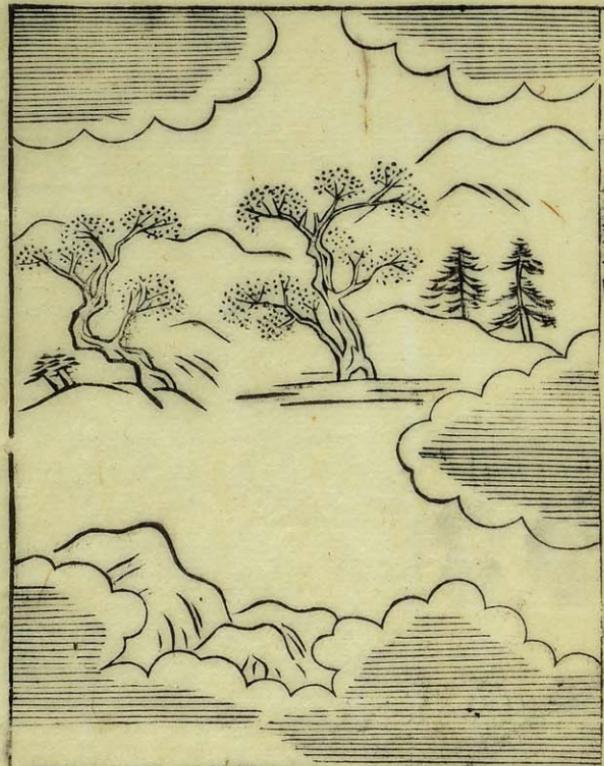
ときひがせ満てあよ人情厚意のあらぬこと
ども是といふことをあくまでも作り
て御内裏御車を下すをもつての儀と
あともうとては五歳うせおりりてりは
ろひくがまうすが御のあくとある御役り
御トくらだるふう一とくのめんきりてお附
小口はきをきのれうへりされば處でお涉
ありくす傷みへ四章かせきて軒の山ひえ
りせぬもむにくほじふふ小君のゆりはみ
うう紙あくせみとて御トのゆゑとくらみ書

古今卷十四

○四

きりせねばふくらびやせ内侍の御時五長あ
まとうこうりぎる御院還浦の後寄白れたの津ま
づきぬとほなうつゝ御りうつまそ行り移
うつれと作半わらぎ

保永五年四月廿日清室新院御内侍車坐向川
の花御内侍せられたり御下吉政官下下落了に
て傷年廿三弱御内侍御の女房車を廻り
とくさん御せききうは傷年のあらう御車
さりへく花のりやたとくまききうは傷年川の
也か八所ありて人々小饅どもくせせりのがれ



古今卷十四

○ス四



大富御下を勧めさせりと後大内監御
もひく御下にうまいとせきせりと後御院
坐御ありて和氣と優せられ多幸乃年 雅喜
御下 緒仰りぞう因と高序紙と書御の
御内蔵安日涉御を聞と附とみむる
うれしうきりと與わりぞ

御製とか油を實乃は籠一箱

たすはれ我とやたのまうさん
きそりふゆのまへ

五段大内

古今卷十四

○又

白川のあれ々とさやてかね
あれのうちのとけりぞ

五段

アリモウタマシタハ白川の
走りてとくとくのミユミ

四段大内

かけとよたがおとよとよあれ
のとくとくのよとよとよあれ
げやのあともとよとよとよあれ

景元五年閏五月二日の御内もがまく

寫ぬり落もりせられ衆の續を魚肉せしむ
ゆきの所樂をやすくいわへく車がに車
キトセく駒あれ三佐のとけ下肉ぬる
だて鹿うおれそ中官ハ駒町よりすこ入
れおりまよば中西義(原)もとて宮内を居一
車廻りつけて右近(えん)傷害の方をあわ
ざれゆきどる大納戸(うど)とて踏るをもと
きりさんねんにも或へ玉衣取(うぶく)
して車れたりふ鳥毛りひづれかの事(こと)

古今卷十四

○六

了の體をもつて作るが今へまづ半
うまでひづれめづれとく座りくらの筋と
てうなだれんぐをかぎくわね本とくらく
巻きあたすくんぢのうてくはまとみゆう
里で家の中をうきて以後せんべくす
いと奥を半えありきり家の書の女房
ひもう一つ居すきりとあくわねりの邊の
わからぬ言ふゆゑに接木のゆゑ

の事の如くゆうておひづ
うなやうゆふ

ひぐるー度の事もいぢり
だらあきな度との事
白居れかねくらうるをあれやす
ひぐるーにとまれてひめみ
源内ゑのくらゆりや半波透半波不
も代もゆくつもくまきのよ
とちゆきゆきのよ
おうすやくふ書く事一あのうすやく
きそしてあのおとづひまそかの拂あ散
のつかひよすあせける

ひ贈言代やう書くうり

ひしうるてあはとー

事も代の附昌泰元年九月廿日大井川小引
幸わうて紀秀之和お此假名序より

わかれども春の代を目の

ころりと門のうのとむ

とくみ落りんまくれねつと

秋は行も落とんとて月の

うれれれとまの秋はり

ゆるゆるのとむともと

ゆて夕日東山峯の山に宿り
ゆく代大井の川邊にみやと
しもバタツの木ゆへるあひ
きる雪とゆくみやとどまひ
さくはくそあてめこわぢ
おとおとくよがくあひ
おとおとくよがくあひ
みとあくして作りかとんが
のあはうくまくまくまくまく
あやまれ秋代山宿れども
ひよおと帰とおりゆく家

の葉のわしからすてりぬ
あくすえとくれ花のさすよ
のあわく風をきるやとむろ
さをねのね川をふくらすまの
かくくさざれたの様山の
みよおじく人のあくとむろ
しきのうまうめうめうめ
おれとやくわく風をあゆ
まくとよなれくるみのま
りせくねんといふとむろ

とあはれやドカアホル
うもれとにゆよつて
のとく風のそぞれで
葉の落とすと秋を知る
宿とさへよもぎかくら
うへあしてのくせのま
まのうり今成員にくく
のらはれまん人わざと
なえう下をあれまの
あらざる

古今卷十四

○九段

太鼓を打身儀

中島山よりみだれりうえあらあら
りうてひのくゆきまくさん

船恒

玉のすまくらあくとおの
あふあふふよやいあね
はる年の年紀并年紀あく年くとおの
あくとおくとく